

# 人文フォーラム

33

2010.8



## CONTENTS

### 巻頭言

神は細部に宿る 人文学部長 安酸 敏眞……1

### Essay

〔新任教員〕

南アフリカ・ワールドカップを  
楽しみながら考える。 上杉 忍……2

### 在外研修報告

ハリコフ便り 寺田 吉孝……4

### ゼミ室紹介

1部 日本文化学科 3年 中川ゼミナール ……6

### 第7回日本文化演習 体験記

……8

### 大学院の窓

仲間との出会い 宋 林 ……13

### 研究、その足跡

……14

人文学部第14期生 卒業研究題目一覧 ……17

編集後記 ……裏表紙

## 巻頭言

# 神は細部に宿る

人文学部長 安酸 敏眞



この四月から人文学部長を仰せつかりました。学内行政に疎い自分ですので果たしてこの大役が務まるかどうか不安ですが、これから二年間宜しくお願いいたします。

さて、もうかれこれ四半世紀前のことになりますが、五年間にわたる海外留学を終えて帰国したわたしは、大学に職を得ることができず、東京の某財団法人に嘱託として雇ってもらって、英語を使う仕事に従事していました。ある日同僚のアメリカ人のメアリー・ヤンデルさんがわたしに紙切れを見せ、「これ誰の言葉か知ってる？」と尋ねてきました。紙切れには God dwells in the details と記されていましたが、誰の言葉か察しませんでした。しかし不思議とその言葉は頭の片隅に残りました。その後大学で教えるようになり、各種の文献や資料を渉猟するうちに、その句の典拠をつきとめることができました。

God dwells in the details は、日本語では「神は細部に宿る」という句で人口に膾炙しています。この句の作者に関しては諸説あり、有名なフランスの建築家ル・コルビュジェ (Le Corbusier, 1887-1965)、ドイツの美術史家ヴァールブルク (Aby Warburg, 1866-1929)、さらにはあのアインシュタイン (Albert Einstein, 1879-1955) をその作者と見なす人もいます。しかし最も一般的には、ドイツ生まれのアメリカの建築家ミース・ヴァン・デル・ローエ (Ludwig Mies van der Rohe, 1886-1969) が最初につくり出したとされています。面白いことに、これにはある意味でまさに正反対の、「悪魔は細部に宿る」(The devil is in the details) という、異なったバージョンもあります。さらには「神々は細部に宿る」(The Gods are in the details) という多神教的な異形もあります。

しかし「神(々)は細部に宿る」と「悪魔は細部に宿る」は、いわば表と裏の関係にあり、どちらも細部の重要性を表わしています。例えば、壮大な建造物やプロジェクトの成否は、それを構成する各部分の完璧さにかかっていますし、逆に、何か大きな失敗の原因はしばしば非常に些細なミスに起因しています。要するに、細部を蔑ろにしない堅実な仕事ぶりが全体の成否を決定するのです。ル・コルビュジェもミース・ヴァン・デル・ローエも建築家でしたので、この句に込められた意味合いはおおよそ見当がつきます。数年前に耐震強度偽装が社会問題となりましたが、どんなに立派に見える建造物も、その一部に致命的な欠陥や手抜きが見つかると、その建物全体が台無しになってしまいます。まさに「悪魔は細部に宿る」と言われる所以です。ですから、建築家は厳密かつ入念な構造計算に基づいて設計し、また実際の工程においても一切の手抜きを見逃してはなりません。

わたしたちが携わっている大学教育も同様です。人間性の陶冶ということがあらゆる教育の根幹にあるかと思いますが、この面での懈怠はやがて由々しき問題を生むことを肝に銘じて、学生諸君の若き魂に正面から向き合っていく所存です。

## [新任教員紹介]

● 南アフリカ・ワールドカップを  
楽しみながら考える。

英米文化学科教授 上杉 忍



この原稿を書いているこの日は、私にとっては、まさに歴史的な日なのである。昨晚、ワールドカップで日本がカメルーンに勝ったのだ。60 を過ぎた私たち夫婦は、手に汗握って観戦し、試合終了と同時に手をたたき合って大喜びした。この日は忘れられない。

私は中学生の時にサッカーを始め、それ以後、休みなく、もう 50 年もサッカーを続けている。このたび北海学園大学に来て、さっそく若い仲間誘われて毎週、早朝フットサルを楽しんでいる。反射神経が鈍り、筋力も衰えたが、夢中になってプレイしている瞬間の快感は、何にも代えられない私の財産だ。



昨年の秋の教職員サッカー大会のあと

かなり昔のことになるが、アメリカに長期研修で出かけた際に地元のサッカークラブに入れてもらい、当時は、サッカーでは日本より後進

的だと思われていたアメリカ人と一緒にある種の優越感を持ってプレイしたことがある。アメリカのサッカーの底辺は広い。どの大学町に行ってもみんながサッカーを楽しんでいる。それでも、何とも素人っぽい私はアメリカのサッカーを馬鹿にしてきた。しかし、何ということだ！今では、アメリカは日本よりもランクを上げ、今回はイングランドと引き分けを演じて見せた。

アメリカ南部農村の黒人史を研究してきた私が、師と仰いできたテッド・ローゼンガーテン博士は、サウスカロライナの海岸沿いに家を建て、地域の子供たちを集めさまざまな活動に取り組んできた。その彼がこの 20 年間取り組んできたのが少年サッカーである。地元の知り合いから土地提供を受け、草刈りをして、平らにし、サッカークラブを始めた。芝生なんてない。集まってくるのはほとんどが貧しい黒人家庭の子供である。（この地域は、かつて米作奴隷制プランテーションの中心地であり、南北戦争中からしばらくの間、解放された黒人たちが自治政府を組織した経験がある。）テッドは子どもたちを州内各地の対抗試合にバスで連れ歩くうちに、州のサッカー界ではそれなりに知られる存在となった。彼は「自分は歴史家としてよりも少年サッカーの指導者として知られている」とジョークを飛ばす。

テッドは、彼のクラブ出身で 19 歳以下の全米代表に選ばれた黒人少年について話してくれた。この少年は、その日の食事にも事欠く文字通りの貧困家庭の出身だった。この少年を遠征先で見出してくれたのは、メキシコ出身の中学校のコーチだった。彼はこの少年を自分の家に引き取り、サッカーを続けさせることを提案してきたのだという。

この話は、今から 15 年ぐらい前の話だが、その時テッドは、「アメリカのサッカーは強くなる。これまでアメリカのサッカーは外国人と白人中産階級のスポーツだったが、今では、バスケットのように黒人が、サッカーを始めているからだ」と言っていた。私はもう一つの原因があると思っている。それは女子サッカーがすでに早くから世界トップクラスだったということである。母親となった彼女たちは、サッカー文化の母体となった。



テッド・ローゼンガートン博士と

今回のワールドカップを機にテレビで南アのアパルトヘイト克服の歴史に関する番組が放映されている。27 年間も監獄にあって、節を曲げず、アパルトヘイト打破の闘いを勝利に導い

たマンデラ氏が開会式に出席することが期待されていた。白人の暴力に屈せず、多数の死者を出しながらも抵抗をやめなかった人々の不屈の精神は、1960 年代のアメリカ南部の黒人たちの抵抗運動を思い起こさせる。勝利ののちも報復するのではなく、「赦そう」とするその精神の気高さには魂を揺さぶる力がある。

しかし、アパルトヘイトは南アフリカの植民地主義の姿の一部だったにすぎない。報じられている通り、近年経済成長著しいと言われるこの国では、貧富の格差と治安の悪さが深刻である。状況は、1960 年代に人種隔離制度を撤廃し、2008 年にオバマを大統領に選んだアメリカと類似している。貧困と人種差別は、監獄人口の激増とは切っても切れない関係にあるが、アメリカでは、1980 年代以後の新自由主義政策の下で、監獄人口が 20 年間に 7 倍も増加し、230 万人（その多くが有色人種）に達し、人口比で世界 1、全世界の収監人口の 4 分の 1 を占めている。1990 年代以後殺人など凶悪犯罪が減少しているにも拘らずにである。

南アでも同様の事態が進み、収監人口比はアメリカの半数に近づいており、2006 年現在、ロシアに続いて世界第 3 位となっている。特に南アの民営監獄の広がりには目を見張るものがある。アパルトヘイトで特定の場所に押し込められてきた黒人たちの多くが今、急激な経済開発の下、監獄に収監されているのである。

今回のワールドカップでは素晴らしいプレイ、感動的な瞬間を楽しみたいものだが、このような厳しい「現実」を知る機会にもしたいものだ。



# [在外研修報告]

## ハリコフ便り

日本文化学科教授 寺田 吉孝

4月11日正午に成田を発ち、夕方5時過ぎモスクワに到着した。モスクワとヴラヂーミルに1泊ずつして用事を済ませ、13日に夜行寝台列車でモスクワを発ち、14日朝にハリコフ（ウクライナ語では「ハルキウ」だが、日本ではロシア語の「ハリコフ」の方が知られているので、ハリコフとすることにする）に到着した。モスクワの駅で酔っ払いに絡まれそうになって逃げたり、列車の中でのパスポートチェックの際に国境警備隊のお兄さんにたかれそうになったりしたくらいだったので、まあラッキーだったと言ってよいだろう。

ハリコフ駅には友人のヴァロージャ（ハリコフ電子通信大学教授）が出迎えに来てくれていた。ヴァロージャの25歳のジグリ（ロシア製の車；日本であれば15年前に廃車になっていたであろう）で宿舎（ヴァロージャが見つけたアパート）に向かった。築40年を経ているブレジネフ時代の巨大なアパートだ。今にも崩れ落ちてきそうなベランダが付いている。しかし、部屋の中に入ってみると、すっかりリフォーム（こちらの言葉で言うと、「イエヴロ・リumont（ヨーロッパ風の修理）」）されている。住所は、「ハリコフ市、レーニン大通り41/43号棟、100号室」である。「100号室」とは覚えやすくてよいような感じがするが、覚えられやすいという難点もある。ちょっと危険な感じがする。

家から100歩ほどのところに地下鉄駅がある。解放記念日にちなんで名づけられた「8月23日通り」と「レーニン大通り」が交差するところにあるので、駅も「8月23日」と命名

されている。ハリコフは、第2次世界大戦時ドイツによって占領されたが、1943年8月23日に解放された。地下鉄駅の真上にソ連風の巨大な戦士のモニュメントが立っている。ハリコフの「町の日」も8月23日である。

ウクライナの首都がキエフで、最大の都市であるということは、よく知られていると思う。しかし、ハリコフがソ連邦ウクライナ共和国の



歴史博物館前の公園に置かれている T34 戦車；T34 はハリコフ生まれ



「8月23日」駅の真上にある記念像

最初の首都であったこと、国内 2 番目の人口（約 150 万人）の東ウクライナの中心都市であることはあまり知られていないだろう。また、ハリコフがウクライナのどのあたりに位置しているかを知っている人は、戦争ゲーム（「ハリコフ攻防戦」など）好きでもなければ、日本ではほとんどいないであろう。しかし、大相撲の元大鵬関の父親の故郷がハリコフ近郊であるということは有名かもしれない。

このハリコフとその周辺が今注目を集めつつある。年末・年始の大統領選挙で当選したヤヌコーヴィチ新大統領の地盤がハリコフ、ドネツクを中心とする東ウクライナなのである。東ウクライナは、歴史的に見て、ロシアとの関係が非常に緊密な地域である。4 月下旬、ロシア大統領メドヴェージェフがハリコフにやってきて、ヤヌコーヴィチと会談した。天然ガスの値段を下げることにセヴァストポリにあるロシア黒海艦隊基地の貸与期間延長とのバーター取引で合意した。これをめぐって、ウクライナ議会が大変なことになったことは日本でも報道されたであろう。西ウクライナの中心都市リヴォフ（ウクライナ語では「リヴィウ」）周辺は、第 2 次世界大戦まで、ロシア領（ソ連領）になったことがなかった地域なので、ロシアに対して距離を置き、西ヨーロッパ、北アメリカとの結びつきを強くしていこうと考えている。そのため、ウクライナでは、東部と西部の対立が深刻になっている。

今回の研修では、図書館（ウクライナ最大級のコロレンコ名称国立ハリコフ図書館がある）や博物館での資料収集、スロボジャンシナ地方（ヨーロッパロシア南部とウクライナ北東部のウクライナ人とロシア人の混住の地）視察、二言語併用の調査などを考えていたが、大学では、ゲストだからということで、多くの先生（みんな 15～20 年ほど前からの友人である）がかまってくれている。大量の資料を収集、作成してきてくれて、マンツーマンで毎日 3、4 時間相手をしてくれる。一人が週 1 回かまってくれるのだが、4 人いるので、週 4 日間、ウクライナ語文法、ウクライナ語正書法史、ウクライナ史、スロボジャンシナのフォークロア、ウ



コロレンコ名称国立ハリコフ図書館にて；左（ハリコフ電子通信大学準教授 M. A. バシキロヴァ）、中央（ハリコフ図書館館長 V. D. ラキチャンシカ）、右（寺田吉孝）

クライナ文学作品講読などで攻めまわられている。予習・復習だけで週 40 時間以上もかかってしまう。また、講演や学会発表なども頼まれ、夢の在外研修が過酷なものに変わりつつある。

昨日、ワールドカップ日本・オランダ戦をテレビで見ていた。実況アナはウクライナ語で、解説者はロシア語で話していた。公用語はウクライナ語なので、テレビ放送のほぼすべてはウクライナ語で行われている。アナウンサー、レポーターはウクライナ語を話すのだが、他の出演者のほとんどはロシア語を話す。しかし、ロシア語には公用語の地位がない。ロシア語の地位をめぐっても東ウクライナ（ロシア語使用地域）と西ウクライナ（ウクライナ語使用地域）の対立は深刻である。

2010 年 6 月 20 日 ハリコフにて



ハリコフ南駅（中央駅）外観

# ゼミ室紹介

## 1 部 日本文化学科 3 年 中川ゼミ



### ゼミ指導教員から.....

3 年生のゼミは卒論作成の準備段階としての役割と、人とのコミュニケーションを学ぶ場としても大事です。発表とディスカッションを通し、学生達はそれぞれの知的好奇心を共有し、互いに切磋琢磨しています。また、異なる文化を持つ留学生との交流から日本人として新たな発見を得て自身の成長につないでいるようです。

(中川 かず子)

### 学生から (順不同) .....

◆自分のテーマは「色を表す言葉と日本人らしさ」です。日々、このメンバーで知的探求ができることに喜びを感じています。ゼミ長もやらせていただけて、充実した時間をいつも過ごせています。今後もどんな知識が得られるのか、すごく楽しみです！

(西島 宙)

◆このゼミでは、日本人の文化や日本語について毎回違ったテーマで発表します。中国人、韓国人、アメリカ人の留学生がいて、日本人には気づかない日本人らしさや他国の文化、考え方も知ることができ、そこが面白いところです。真面目に考え、意見を交わしていくのでとても楽しいゼミです。みんな大好きです！

(井上 みのり)

◆全員が意見を出し合うところがいい。日文の顔ぶれを見ると他学科に比べ内気で内向的な雰囲気が出ている。知性や品格から想像するに正直議論が成立するのか疑わしかった。それだけに、全員が率直な意見を滔々と述べる様子には驚いた。6 人の留学生も大きな影響を与えている。日本人同士の討論・議論では辿り着かない発想や深みが中川ゼミにはある。

(森岡 祐樹)

◆中川ゼミでは、日本人と日本語について毎回担当者が発表しみんなで意見交換していきます。特に面白いのは、日本人だけでなく留学生の意見を聞くことで多角的に捉えられることです。また、個性的なメンバーが揃っていて楽しく活動しています。これからもみんなで協力してゼミを盛り上げていきます！

(江川 大地)

◆このゼミは言語系、特に日本語教育についても扱っていますが、基本的には自由なテーマで早い段階から発表や意見交換を活発に行っています。色々な人の意見を聞くのはとても勉強になるし、楽しいです。一言で「楽しいゼミ」です。

(鈴木 晴香)

◆ゼミでは、日本語や日本人の文化性について、韓国や中国、アメリカの留学生の方々とともに学び、

意見交換をしています。日本人らしさとは何か、みんなで考え、自分なりに答えを見つけたいです。  
個性豊かな人達が集まっていて、毎回楽しいです！ (大宅 麻恵)

- ◆ゼミでは、特に留学生の文化（アメリカ、韓国、中国）との比較による日本の言語文化の特徴を考えています。明るい人が多く、議論も活発です。留学生との交流もでき、和やかな雰囲気です。楽しいゼミです。(太田 早紀)

- ◆主として日本語の運用について学び、研究しますが、留学生が6人いて様々な方向から意見交換ができます。また、他国から見た日本語についても知ることができます。ゼミ外でも留学生から学ぶことは多く、日々成長させてもらっています。(中村 悠里子)

- ◆自分が日本人であることを意識し、文化の違いを比較・研究する。それができるのがこのゼミの特徴です。留学生との意見交流は、新たな発見が多くあり、自分のテーマがより深く学べる充実した時間です。また、個性的な人が多く、毎時間笑顔で楽しく過ごせます。(林 あゆ美)

- ◆普段何気なく使っている日本語や、自分達では気づかない日本的な考え方や文化について深く知ることができ、尚且つゼミ生の多種多様な考え方や留学生ならではの考え方を聞くことができ、興味をもって臨むことができます。(宮野 里紗)

- ◆ゼミでは留学生が多く異文化交流ができます。恥ずかしながら、留学生は日本人の僕達よりも日本語をよく学んでいます。普段当然と思うことが他文化では通用しないということも知ることができます。他のゼミにはない楽しさがここにはあります！(鴛田 祐哉)

- ◆韓国では演習という授業がないので、始めは心配もありましたが、日本人の学生と意見を交わしながら日本人の思想や文化がわかるようになりました。ゼミでは異文化研究や日韓対照研究もでき、着実に授業に臨めば得られるものが多いと思います。(パク ヒョンジュン)

- ◆ゼミは初めてなので、慣れない授業形式で戸惑うこともありましたが、徐々に自分の意見や考えで話すことが楽しくなりました。自分の発表の時はミスも多くて落ち込んだりもしましたが、よい経験になったようでゼミを履修してよかったと思います。(ベ ウオンヒ)

- ◆このゼミでは日本人と留学生が意見を交わし学びます。他の国と日本を比較するのも興味深く、日本人学生と日本について論じます。人数が少ないせいか、みな仲もよいです。時々議論が熱くなることもあります。純粋に意見交換を楽しんでいます。(ユン ソヒ)

- ◆日本人と留学生が「日本人」や「日本語」について色々と学び、討論します。ゼミに参加してから日本人学生とコミュニケーションができ、日本語の特徴や日本人の発想をより理解できるようになりました。ゼミでは楽しく学んでいます。(楊紅敏)

- ◆日本に来る前にはこんなに詳しく日本と色々な国の違いを勉強していなかったので、ゼミは本当に面白いと思います。皆さん優しく、僕の日本語を我慢して聞いてくれて、すごく勉強しやすいです。(フィル・カランドラ)

- ◆学生がとても積極的に意見を言い合い、議論が白熱することもあります。これはとても大事なことだと思うし、自分自身楽しく参加しています。留学生が多いので、異なる文化も学ぶことができ、興味深いです。(孫 サンサン)





# 第 7 回 日本文化演習

## 身にしみて吸収されていく時間

2009 年度の日本文化演習は、2010 年 2 月 22 日（月）から 27 日（土）の 6 日間、近畿（京都、奈良、大阪、神戸）において、学生 32 名、引率教員 4 名によって実施された。初夏のような季節外れの陽気に恵まれ、二日酔い以外、体調を崩す学生もほとんど見受けられず、順調に 6 日間の研修を終えることができた。宿泊、移動等に関しては、名鉄観光の添乗員さんとバスガイドさんのリードのもと、引率教員が何もしないでよいくらいスムーズに行われた。

4 月中頃から在外研修でウクライナのハリコフに滞在している。築 40 年ほどの集合住宅の台所で、この原稿を書いている。研究対象に関係している地に来ると、図書館や博物館での資料収集、現地調査による情報収集、専門家からの教授など、何かと得ることが多い。しかし、最も刺激的なのは、書物等で触れた事柄の舞台に今自分がいるのだということである。日本文化演習に参加した学生達も、大学での授業や書物で学んだ事柄と関係する地に身を置き、頭の中に知識として入っていたものが身にしみて吸収されていくのを体感したであろう。これが日

本文化演習における大きな収穫であると思う。

今回の研修では自主研修日を 2 日設けた。当日、予想に反して、教員と行動を共にする学生が非常に少なかった。各教員は何通りか研修コースを考えていたが、それについての十分な説明が学生達に出来ていなかったのかもしれない。反省すべき点である。しかし、教員主導ではなく、学生自身によって研修計画を立てて行動するというのは能動的で望ましいことでもある。

祖父の突然の訃報があり、研修半ばで帰札しなければならなくなった学生が出た。研修を切り上げざるを得ない事態だったにもかかわらず、今回の旅行保険では、帰りの飛行機チケット代等が保障されなかった。今後は、このような場合にも保障されるような保険への加入も検討すべきだろう。

参加費用は出来るだけ抑え、研修は出来るだけ充実したものにするように努力したつもりだったが、上記の保険の件を含め不十分なところもあったと反省している。今後、さらなる改善、工夫をしていきたい。

（寺田 吉孝）



# 鴨川彼方

日本文化学科 3 年 石井 僚一

『鴨川等間隔の法則』といって、鴨川にはカップルが等間隔で並ぶらしい。おそろしい文化である。僕はそのことをちゃんと知っていたのに！ 迂闊だった。なにも考えていなかった。夕刻。日はもうほとんど落ちている。18：19。

その31分前、17：48。まだホテルに戻るには時間があつた。ああ、スイーツが食べたい。食べたい。そうだ、抹茶スイーツなら文化だ！ 食べてもいいはずだ。行こう。行こう。それだけだった。僕は、『都路里』というお店に足を向けた。

再び、18：19。四条大橋を渡る。目下の川沿いには、カップルが確実に等間隔を形成していた。ワールドエンドオオオオオオオオ！！と叫びたい。叫べない。目をそらす。そうだ、見る必要はない。パフェだ。僕には抹茶パフェが待っている！ 行かなくちゃ。僕は足を進めた。

18：57。僕の前には都路里パフェがあつた。人気店ゆえに入店まで20分ほど待たされたがどうでもいい。あなたがそこにいればいい。パフェを一口、パクっ。うーん、美味。抹茶スイーツだけに甘さは控えめで、さらっといける！ くせになる！ スプーンは進んだ。

その帰り、19：48。再び鴨川。怖いもの見たさである。僕は、川に沿って歩いている。あー、近い。男と女、近い。ちょっと暗いからってベタベタし過ぎじゃねーの。とかいって、その後ろを歩いている自分はなんだ？

大丈夫か？ 大丈夫じゃない。あー、あそこには二人の世界。あそこにも二人の世界。ここには一人の世界。等間隔を確認する為に自分の歩みをカウントしてみる。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三、  
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三、  
一……。ああ、等間隔！

このあとは不眠ノ夜編に続くがそれはまた別の話である。その他、太陽の塔激闘編とか、相部屋五十七歳編とか、危険地帯迷子編とか、比叡山 vs 薄着編とか、色々あるけれどもこの辺で。

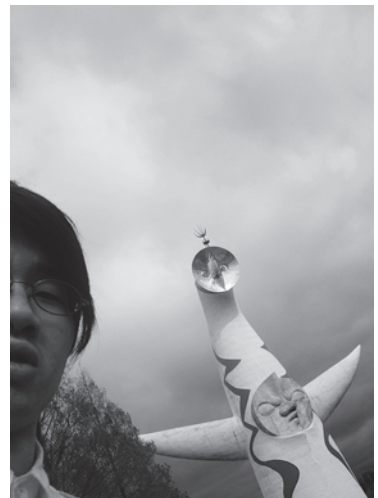
この5泊6日を越えて、人間らしさ9↓、体力23↓、独り言48↑、孤独20億光年↑とかなり残念な感じだが、人文学部らしさは37↑な気がしている。実に濃い体験であった。

日本文化演習にあたって旅費を出してくれた両親、旅先での私の様々な無礼に笑って応じてくれた人文学部みなさん、並びに同行してくださった先生方に感謝を表し、この体験記を締めさせていただきます。

本当にありがとうございました！



雨は病まない編その2 渡月橋



太陽の塔激闘編

# 色んな視点からの京都旅行

日本文化学科 3 年 佐々木 真美

人文学部には京都に行くことのできる研修旅行がある。

真面目に計画を立てて歴史や文化を学んでくるのも良いし、ノープランで京都を自由に歩き回って楽しんで来るのも良い。歩けば何かしらの寺院や文化遺産に辿り着く。それが京都だ。

自主研修は五泊六日のうち二日間ある。一日目、何も計画を立てていなかった私は取り敢えず金閣寺に行くことにした。人生二度目の金閣寺である。一度高校の修学旅行で金閣寺を見たことがあったが、天気にも恵まれ二度目の金閣寺もとても綺麗だった。行動をとともにしていた引率の先生が三島由紀夫の『金閣寺』の説明をして下さったことも思い出深い。世界遺産としての金閣寺も良いが、文学という観点から金閣寺を見ることが出来た貴重な時間だった。

二日目、念願だった伏見稲荷大社へと私は足を運んだ。計画を考えずに行動していたが、前々からここだけにはどうしても行ってみたかったのだ。

伏見稲荷大社は JR 伏見稲荷駅を出て、左斜め前に進むと直ぐにある。周辺の道が狭く、その時は雨が降っていたので視界もあまり良くな

かったが、大きな赤い鳥居はハッキリと見えるから迷うことはなかった。

無限に続いていると思ってしまうほどの赤い鳥居や、お稲荷様に感動しながら鳥居の中を上へ上へと歩いて行っただが、私は途中で疲れてしまった。天候が悪かったのも原因だが、数え切れないほどの鳥居が長く続いているのだ。私は上まで行くのを諦め途中で下り、甘味屋さんで一休みすることにした。

そこで出会ったお店のお兄さんとの会話が、この旅行で一番勉強になったと私は思う。地元の人々の目線での京都や、北海道と京都の違いなどを話したことは、有名な寺院を見学するよりも身近に京都を感じることが出来た。少しだけだが京都の人の生活に触れたような気がするのだ。地元の人と触れ合うことで、今まで私が持っていた京都に対する、見た目だけの固定概念が良い意味で壊れたのもこの時である。

寺院や文化遺産を見学することも大切だと思うが、地元の人たちと触れ合うことは、旅行でしか得ることが出来ない掛け替えのないものではないだろうか。と私は思う。



快晴の中での金閣寺



伏見稲荷大社



# デジカメ片手に初春の京都へ

日本文学科 3 年 田湯 俊彦



灯籠と桜

私のデジタルカメラに収められている写真の中で、一番古いものは新千歳空港で出発前に撮影した友達のピースサインである。その日の北海道は寒かったのだろうモコモコのダウンなんぞを羽織って写っている。京都の気候なんて見当もつかないものだから、私もしっかり厚手のジャンパーを着込んでいる。次のショットには誰一人として上着を着てはいないから、きっと予想以上に京都の春は暖かかったのだろう。それでも皆行く前とは寸分違わぬピースサインを突き出している。満面の笑み、見ているだけで楽しそうである。

一応念のため確認しておくが、私はこの旅行に参加している。写真を撮った瞬間も、その前後の状況も、昨日のここのように思い出せる。だが写真に限らず記録物はそれそのものを客観的に見せる効果を持つ。それでちょっとだけ客観的に序文を書いてみたのである。

さて、いきなりだがデジカメは良い。本来ならここで『京都は良いところである』と書くのがこの文章の本義なのだろうが、それは他の皆さんが書いてあるだろうと思うので私はあえて止める。この旅行中、私はずっと片手にデジカメを握りしめて京都をぶらぶらしていた。気になるものがあったら、撮る。面白いものがあったら、撮る。シャッターチャンスは、もちろん

撮る。を繰り返しているとおよそ写真は五十枚くらいになった。デジカメは良い。普通のカメラなどと比べて、気兼ねなく被写体に向かえる気がする。どうでもいいものでも「後で消せばいいか」と思ってシャッターを押してしまう。その気軽さがデジカメの良さである。何気なく撮った桜も川も何枚も撮れば一枚くらい魅力的に見えるものもある。ふとしたカットが時として京都を艶やかに切り撮った結果になりうるのである。

歴史的建造物や和を感じさせる料理、風流な庭。京都はこれらに溢れている。これらは魅力も多く、また撮影可能なものであれば誰彼構わずシャッターを押す。ガイドマップに載っているようなありきたりな写真では実際に体験してきた京都旅行を表現することができない。私はそう感じた。カッコよく、また大学生っぽく言えば「アイデンティティを獲得したかった」のである。そう考えたら、どうでもいい写真が多くなった。

デジカメは良い。そしてまた京都の景色とよく似合う。古き良き日本の文化と最新の技術の集合体とがうまい具合に作用している。有名な文を引用して表すなら、それは「富士山と月見草ぐらいよく似合う」と思うのだが、どうだろうか。





# 檸檬の京都をあるいて

日本文化学科 3 年 和田 楓子

中世、近世は言わずもがな、近代文学において、京都を舞台とした文学作品は多い。芥川龍之介、三島由紀夫、川端康成、志賀直哉、夏目漱石、谷崎潤一郎……京都住まいの経験有るなしはあるだろう。しかしそれぞれが、また、挙げた他にも多くの文学者たちが古都に思いを寄せた作品を残した。現代でもそれは変わらず、京都を舞台とした傑作品は今なお数多く生まれ続けている。

京都が舞台となる作品としてまず最初に挙げられるであろう作品がある。梶井基次郎の「檸檬」だ。この小品は高校課程の教科書でよく取り上げられるため、梶井の他作を知らずとも、これだけは知っているという人も多いだろう。

大阪出身の梶井は学生時代を京都で過ごし、若くして辞世した。「檸檬」は短命ゆえ作品が少ない梶井の代表作でもある。作中、精神の混乱を窮めた「私」は、一顆の檸檬を懐に忍ばせながら、真夏の京都をあてどなく徘徊し、丸善にたどり着く。作中では、その道中、街中で「私」が得た心象が、日常風俗の中に見られる退廃的な美とともに描かれる。

二日間の自由行動日の中で、嵐山や祇園を散策するほか、「檸檬」作中の「私」の足取りを辿った。作中において主人公が訪れ檸檬を求めた八百屋、「八百卯」の前、二条寺町から、作品

当時丸善が立地していた麴屋町三条を目指し歩いた。

作品からは「私」はずいぶんと時間をかけて洛中を徘徊したように読み取れたが、「八百卯」前から寺町を下り、三条通に突き当たったら西に向えば、当時丸善があった麴屋町まではすぐにたどり着くことが出来た。だいたい直線距離で 600m くらいか。「私」の徘徊中の情景描写の濃密さからの落差が激しい。これは実際に現地を訪れてみなければわからなかった実感だろう。



麴屋町三条。作品発表当時には丸善はここに建っていたと思われる。

作中の道のりをなぞることは一当時と街の様子が大きく変わっていても、追体験として身体的実感を私に与えてくれた。今回の演習によって、より深い作品理解を得ることが出来たことを、これからの学びに生かしていきたい。



作中に登場した八百屋「八百卯」。  
昨年中に閉店している。

# 大学院の窓

## 仲間との出会い

文学研究科 日本文化専攻 修士課程 1 年 宋 林



私の大学院生活は今年の四月からスタートしました。時が経つのは本当に速いもので、日本に来てそろそろ一年になりますが、この一年間、私にとっては人生にプラスになるいろいろな思い出がありました。

研究生として日本に来て、勉強し始めた私にとっては忘れられないことがたくさんありました。半年の研究生生活、それは研究の面だけでなく、私自身にとっても大きな成長でした。ゼミでの日本人学生たちとの出会い、みんなとの交流を通じ、日本人のものの考え方などをより深く理解するとともに、みんなも私を通じ、中国により深く興味を持ち、お互いに勉強し合ういい機会でありました。いちばん嬉しかったのは、参加していた 2 部ゼミで、日本人学生が多民族国家である中国のウイグル民族に関する論文を発表した時でした。中国人である私も詳しく分からなかった部分まで知ることができ、超感動(?)的で、興奮を覚えました。

研究生としての「磨き」も半年で終わり、今年四月、ついに大学院生としてもう一つの新しいチャレンジが始まりました。いよいよ目標である修士課程に入って喜んだのも束の間、自分の論文テーマや内容に関して常に意識しなければならない毎日と闘っています。大学の中から日本文化に深く興味を持ち、大学卒論も「日系企業の社内教育」について考察

して発表した私にとって、大学院修士課程では日本の文化をさらに研究できる良いチャンスだと思っています。指導教授である中川先生といろいろ話し合い、私は「日本企業内の日本人と中国人の面子観・価値観及びコミュニケーションスタイル」の内容について研究することになりました。日本という国に身を置いたのも短くて、さらに日本での就職経験も無かった私にとってこの研究テーマはそんなに簡単なことではありませんが、自分の興味に対する思いを募らせ知識を吸収し研究に反映させたいと思っています。そして、自分の周りにはいつも優秀でやさしい先輩達や厳しい先生方がいます。仲間や先輩、先生方の協力や励ましを受ければ、どんな難関でも乗り越えられると思います。

将来日本企業への就職を目指している私は、今後 2 年間日本文化をきちんと身につけて、大学院という大家族の中で留学生としての役割をきちんと果たしたいと思います。仲間みんなと仲良く、助け合いながら充実した楽しい大学院生活を送れるよう頑張ります。



## ■学会・研究発表

### テレングト・アイトル

「アジアにおける三島文学とは何か」3月、ドイツ国際会議「三島の世界的影響とそのマルチ・カルチュラルルーツ」主催：ベルリン・ブランデンブルグ 社会人文学アカデミー、ベルリン自由大学 (2010.3.18-3.20)。

"What is 'Asian' about Mishima's Literature?" (March 19th, 2010. In English)

The International Conference "MISHIMA! Worldwide Impact and Multi-Cultural Roots". Host: Berlin-Brandenburg Academy of Sciences and Humanities; Freie University Berlin, in Berlin, Germany (March 18-20.).

### 大石 和久

「日本映画における北海道表象」4月1日、東アジア美学合同国際研究会 (第5回東方美学会・第16回日韓美学研究会)、広島大学 (東広島キャンパス)・学士会館

### 大谷 通順

「《金瓶梅》と骰牌遊戯——小説里賭博風俗描写之作用」6月、第1回中国古文献および伝統文化国際学術シンポジウム (中国社会科学歴史研究所・北京師範大学古籍与伝統文化研究院・香港理工大学中国文化学系主催)、香港理工大学

## ■著作・論文など

論文

### テレングト・アイトル

「アジアにおける三島文学——自決後四〇周年によせて——」3月『人文論集』第45号 北海学園大学人文学部 (67-86頁)

### 上野 誠治

「ヴェルネルの法則に見られる記述の多様性とその原因について」2009年11月『人文論集』第44号 北海学園大学人文学部

### 大石 和久

「瞬間表象とベルクソン哲学—写真と絵画の瞬

間—」3月、『人文論集』第45号、北海学園大学人文学会

### 小野寺 静子

「大伴池主——『氏族の人等』をめぐって——」5月、『国文学年次別論文集』上代2 朋文出版

5月、『日本史学年次別論文集』古代分冊 朋文出版

「唱和の可能性——万葉集巻四・六五〇～六五二歌——」5月、『国文学年次別論文集』上代2、朋文出版

### 桑原 俊一

「アトラ・ハシース叙事詩 (Atra-hasīs) (2)」2009年7月、『人文論集』43号、北海学園大学人文学会

「アトラ・ハシース叙事詩 (Atra-hasīs) (3)」2009年11月、『人文論集』44号、北海学園大学人文学会

「日本正教会と北海道—前史から函館のニコライヘー」3月『開発論集』85号、北海学園大学開発研究所

### 田中 綾

「大逆事件と近代日本」6月、現代短歌研究会編『〈殺し〉の短歌史』水声社、33-49頁

### 手塚 薫

「千島列島における集落生業形態の考察」2月、『比較考古学の新天地』菊池徹夫 (編) 同成社

### 安酸 敏眞

「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』——翻訳・註解 (その4) ——」2009年7月、『人文論集』43号、北海学園大学人文学会

「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』——翻訳・註解 (その5) ——」2009年11月、『人文論集』44号、北海学園大学人文学会

「アウグスト・ベークの解釈学」2009年12月、『年報 新人文』第6号、北海学園大学大学院文学研究科

「解釈学と歴史主義——A・ベークとJ・G・ドロイゼンを中心に——」3月、『人文論集』45号、北海学園大学人文学会

#### 岩崎まさみ

「研究する側と研究される側—先住民族調査における課題—」3月、『アイヌ研究の現在と未来』北海道大学出版会

#### ■講演など

##### 上杉 忍

「世紀転換期における『科学的』人種主義と優生学の間——東欧系移民の『人種化』から『白人化』へ」3月、西南学院大学国際文化学部（西南学院大学、福岡）

##### 中川かず子

「日本人の言語行動と日本語」、雲南師範大学特別講演、雲南師範大学、3月  
「中国での日本語教授法—言語と文化をどう結びつけるか」、雲南師範大学教員研修会、雲南師範大学、3月

##### 安酸 敏眞

「解釈学と歴史主義——A・ベークとJ・G・ドロイゼンを中心に——」1月10日、京都ヘーゲル讀書會冬季研究會（京大会館）  
「ニーバーと『エルンスト・トレルチの影』」5月、ラインホルド・ニーバー研究会第1回例会（聖学院大学総合研究所主催）

#### ■評論・エッセイなど

##### 上野 誠治

「ことばの窓を通して人間を知る」『学報』第82号6月、北海学園大学

##### 大石 和久

「映画紹介『団旗の下に』（大須賀康之・根来和宏監督、ゆふいん文化・記録映画祭後、編集した2009年度版）」2月、『日本映画学会会報』第21号（2010年2月号）[<http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp/nl1002.html>]

##### 小野寺静子

「古典散策 万葉歌人・大伴三依の歌」2月、『藝林』、藝林発行所

##### 田中 綾

（書評） 洲上愛著『朱夏』（短歌新聞社）、『短歌現代』3月号

（書評） 江田浩司著『私は言葉だつた 初期山中智恵子論』（北冬舎）、『北冬』11号

（評論）「深田久弥の青春短歌」『労働文化』221号 ◇「佐藤春夫の〈火〉」『短歌往来』5月号

（エッセイ）「福島泰樹『完本 中也断唱』を読む」『現代詩手帖』3月号 ◇「わたしは人を殺しましたか—ゼロ年代短歌展望」『現代詩手帖』6月号

（連載）「歌の周囲」『現代詩手帖』1月号◇2月号◇4月号◇5月号

（連載）「書棚から歌を」『北海道新聞』1月10日◇1月17日◇1月24日◇1月31日◇2月7日◇2月14日◇2月21日◇2月28日◇3月7日◇3月14日◇3月21日◇4月4日◇4月11日◇4月18日◇4月25日◇5月2日◇5月9日◇5月16日◇5月23日◇5月30日◇6月6日◇6月13日◇6月20日

（連載）「歌壇選+コラム漢字の歌」『朝日新聞』道内版 1月21日◇2月4日◇2月18日◇3月4日◇3月18日◇4月1日◇4月15日◇4月29日◇5月20日◇6月3日◇6月17日

##### 手塚 薫

「私が薦めるこの1冊 奥田英朗『無理』」1月、『図書館だより』Vol.31 No.4、北海学園大学附属図書館

##### 中川かず子

「本学における留学生教育の歩みと今後の発展に向けて」3月15日、『学報』第81号、北海学園大学

##### 濱(浜) 忠雄

（時評）「ハイチの大震災と『植民地責任』」3月、



『人文フォーラム』第32号、北海学園大学人文学部  
（時評）「ハイチの大地震と『植民地責任』」6月、  
『歴史学研究』第868号、青木書店

### ■翻訳

#### 寺田 吉孝

「アイヌ語・ロシア語辞典（7）」3月、『北海学園大学学術論集』第143号、北海学園大学学術研究会

### ■研究費

#### テレングト・アイトル

科学研究費補助金・基盤研究A（代表：稲賀繁美、2010～2013年度）「東洋」的価値観の許容臨界—「異質」な思想・芸術造形の国際的受容と拒絶（研究分担者）

北海学園大学学術助成・共同研究（代表：船岡誠、2010年度）、「新人文主義の位相——基礎的課題」（研究分担者）

#### 上野 誠治

北海学園大学学術助成・共同研究（代表：船岡誠、2010年度）、「新人文主義の位相——基礎的課題」（研究分担者）

#### 追塩 千尋

北海学園大学学術助成・共同研究（代表：船岡誠、2010年度）、「新人文主義の位相——基礎的課題」（研究分担者）

#### 桑原 俊一

北海学園大学学術助成・共同研究（代表：船岡誠、2010年度）、「新人文主義の位相——基礎的課題」（研究分担者）

#### 手塚 薫

科学研究費補助金 基盤研究（C）「千島列島における資源・土地利用の歴史生態学的研究」（研究代表者 手塚薫）

総合地球環境学研究所研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」（研究班員 手塚薫）

開発研究所総合研究『分権型社会における地域

自立のための政策に関する総合研究』（研究参加者 手塚薫）

#### 船岡 誠

北海学園大学学術研究助成・共同研究（2010年度）「新人文主義の位相—基礎的課題—」（研究代表者）

#### 安酸 敏真

科学研究費補助金（基盤研究C）、研究代表者（安酸敏真）、研究課題「解釈学と歴史主義——A・ベークとJ・G・ドロイゼンについての事例研究——」。北海学園大学学術助成・共同研究（代表：船岡誠、2010年度）、「新人文主義の位相——基礎的課題」（研究分担者）

### ■その他

#### 上野 誠治

「送る言葉—栗原豪彦先生に感謝を込めて」、『人文論集』第45号 3月、北海学園大学人文学部

#### 大谷 通順

第9回「漢語橋」世界大学生中国語スピーチコンテスト北海道予選大会審査員、6月、中華人民共和国駐札幌総領事館・札幌大学孔子学院主催、札幌大学

#### 中川かず子

第32回全北海道学生競技ダンス大会後期新人戦、大会会長、2月7日、北海道大学第一体育館 ◇第28回全北海道学生競技ダンス大会八種目戦、大会会長、6月13日、北海道大学第一体育館 ◇中国雲南省雲南師範大学、昆明大学訪問、3月10日～3月17日 ◇米国ノースイスター大学夏期日本語・日本文化研修講座コーディネータ、5月31日～6月21日、北海学園大学

## 〈日本文化学科〉

### ・指導教員 菅 泰雄

- 安 立 悠 樹 「現代漫画作品に用いられる振り仮名の分類と論考」  
 阿 部 静 香 「北海道のアイヌ語地名—アイヌ語地名の保存—」  
 池 田 舞 「Mr.Children の歌詞の魅力について」  
 大 木 宣 彦 「大竹のボケは「あいまい」であるから笑える」  
 佐々木 沙 織 「若者語から見る現代の若者の対人関係について」  
 高 橋 美 里 「じゃんけんの変遷—大人の拳から子どものじゃんけんへ—」  
 谷 村 悠 紀 「「愛」と「恋」の違い」  
 古 川 真 末 「差別語に関する大学生の意識及び考察」  
 吉 田 裕 司 「鳥居みゆきを通して考える、お笑いの「ネタ」の作品性と奥深さ」  
 吉 田 伶 衣 「現代日本のエコロジー」  
 辻 本 紗 弓 「オノマトペの持つ性質について—オノマトペの独創性—」  
 安 達 梓 「奥尻島方言の特徴と移り変わりの考察」  
 井 上 野 花 「敬語とポライテネス」  
 江刺家 真 「論理的思考と非論理的思考についての考察—国語教育への提案—」  
 太 田 裕 美 「日本語の「文」の中での「モダリティ」の存在意義」  
 杉 内 恵美子 「「星の王子さま」にみる役割語—翻訳比較を通して考える役割語の利用—」  
 葛 西 直 樹 「方言と共通語の東西差を探索」

### ・指導教員 徳永良次

- 荒 川 恭 介 「落語における間（マ）の使われ方とその意味—5 代目柳家小さんと 10 代目金原亭馬生それぞれの間に違いはあるのか—」  
 江 良 和 洋 「「エコ」とは何か—環境問題の歴史・報道・流行から「エコ」を定義する—」  
 大 塚 あゆ美 「コブクロの魅力—小渕健太郎の綴る日常—」  
 黒 宮 以久子 「「自己本位」を回復せよ—漱石に学ぶ時代への向き合い方—」  
 小 坂 亘 「「古池や 蛙飛こむ 水のおと」はどうやって成立したか—蛙の存在と水の音の謎について—」  
 小中出 亘 「米澤穂信作〈小市民〉シリーズ「小市民」という言葉の意味—」  
 小 林 絵 美 「禁色—許されなかった色—」  
 坂 本 恵 「源氏物語の中のもの怪—葵巻における物の怪—」  
 佐古田 ちづる 「ニシン漁—ニシン漁を支えた場所請負制度について—」  
 高 田 明 子 「日本の食文化—食卓にみる団らんの形成—」  
 松 橋 佳 樹 「流行を受け手の側から考察する—「アムラー」を例として—」  
 安 田 まどか 「源氏物語にみる「草食男子」・「肉食女子」—現代に蘇る、彼らの恋愛事

情—」

矢 橋 亜 弥 「夕顔の人物像—夕顔の花と白という色彩の視点から—」

### ・指導教員 中川かず子

- 赤 沼 瑤 子 「女性語とジェンダーについて」  
 穂 元 千 紘 「欧米人のコミュニケーション方略」  
 新 井 康 平 「CHANGE CHALLENGE」  
 今 田 春 香 「若者語、新語、流行語の使用による言葉の乱れについて」  
 遠 藤 正 成 「英語教科書から見る英語教育」  
 小田切 加 奈 「日本の歌における外来語・外国語—歌は世につれ 世は歌につれ—」  
 加 藤 珠 恵 「国際化によって変化した日本語」  
 工 藤 繁 「英語との対照にみる「日本語らしさ」とは—新聞見出しの比較から—」  
 中 川 希 望 「非言語コミュニケーションとしてのダンスの考察」  
 中 村 智 哉 「若者語について—日本語の乱れとは—」  
 中 村 美 智 「日本人とタイ人の言語行動の比較」  
 藤 原 晋 「札幌の在住外国人への日本語教育—多文化共生社会としての札幌を目指して—」  
 三 木 亜 弓 「伊坂幸太郎の小説における日本語レトリックについて」  
 石 沢 治 郎 「The Beatles の現在のあり方を考える」  
 菊 池 有佳子 「韓国の若者の敬語使用とその変化について」  
 坂 東 香奈子 「日米の比較にみる若者たちの意識—世界青年意識調査より—」  
 森 山 英理子 「日英表現の事柄と視点における焦点の相違」  
 山 田 未 来 「日本語の授受表現について—やりもらいの表現心理について—」  
 出 町 真 美 「肢体不自由生徒のひらがな学習における支援の実態—生徒の実態に基づいた個に応じた授業の充実—」

### ・指導教員 大石和久

- 明 石 杏 菜 「恐怖映画についての考察—J ホラーの魅力的な怖さとは—」  
 浅 野 良 大 「「生きろ。」—宮崎駿の自然観—」  
 石 嶋 南 絵 「『サマータイムマシン・ブルース』の舞台版と映画版の比較から見る演劇と映画の決定的な違いについて」  
 上 野 託 「クリント・イーストウッド監督作品におけるヒューマニズム、ミステリーの深さについて」  
 宇 藤 幸 世 「『レッドクリフ』研究—映画と原作の関係—」  
 大 江 智 士 「ゴジラー怪獣王の歩みとその役割—」  
 澤 谷 こなみ 「ティム・バートンの世界—その影がうむもの—」  
 鈴 木 達 也 「『スター・ウォーズ』—ジョージ・ルーカスが表現したかったもの—」  
 鈴 木 由 美 「オタクによるオタクのためのオタク論考」  
 清 野 佑 花 「映画にみる炭鉱の姿」

# 人文学部第 14 期生 卒業研究題目一覧

高 橋 息 吹 「『FULL METAL JACKET』研究—FULL METAL JACKET とは何だったのか—」  
 田 村 郷 平 「『ガンダム』が我々に語りかけるメッセージ」  
 花 巻 杏 里 「久石譲に探る映画音楽の魅力」  
 輪 島 詩 織 「TEAM NACS の魅力—ACTOR ～演じ続ける 5 人の道産子—」  
 三 浦 敦 嗣 「劇場版『名探偵コナン』の魅力」  
 佐 藤 頌 「大杉漣という俳優」  
 筒 井 黄菜里 「イギリス映画にみる女性たちの「婚活」」  
 橋 本 茉里絵 「『映画と書』—映画の題字デザインの重要性と書による効果の考察—」  
 柏 野 晃 奈 「アニメーションと漫画—芸術性とコミュニケーションカー—」

## ・指導教員 須田一弘

飯 島 千 恵 「中標津町における酪農業」  
 片 岡 勇 貴 「少年野球の存在意義」  
 小 松 綾 乃 「何故、女性のタバコは嫌われるのか」  
 佐 藤 晴 香 「日本酒について」  
 細 川 愛 「日本の神話と南太平洋の神話」  
 堀 真 紀 「日本におけるエスニック料理についての考察」

## ・指導教員 郡司 淳

伊 藤 剛 「ラーゲリに生きて」  
 太 田 実 希 「中富良野神社、祭祀のあゆみ—地域にみる神社の存在形態と存立基盤—」  
 金 子 海 平 「兵士として生きるとは—人間から兵士へ、兵士として、それでも人間として—」  
 菊 田 麻里奈 「我が家の家庭料理の形成—北海道における家庭料理の存在形態—」  
 栗 本 未 紗 「〈境界〉を生きる吃音者」  
 佐 藤 勇 治 「十勝沖地震の研究—今後の北海道で生かすために—」  
 高 本 博 文 「北海道観光の現状と未来」  
 縄 手 祐 美 「新選組副長・土方歳三」  
 藤 井 あゆみ 「民主主義の具現」  
 藤 澤 詩 織 「大正時代における「文化」生活の存在形態—主に出版物を素材として—」  
 三 上 達 也 「自衛官という道」  
 吉 田 明 「マンガ創作論—作者と読者の双方向性を手がかりとして—」  
 熊 谷 友 良 「二・二六事件の思想的構造—磯部浅一を中心に—」  
 田 中 田鶴子 「十勝野にそっと咲いたリリの花—渡辺カネの生涯—」  
 荒 木 奈緒美 「荒木家の歴史」  
 木 村 由 美 「地崎宇三郎三代の記憶」  
 更 科 大 輔 「揺れるウチナーンチュー—米軍基地問題解決への考察—」  
 澤 村 華 奈 「紅色蝶々」  
 鈴 木 泰 法 「日本サッカーの未来」  
 高 木 悠 輔 「北海道観光発展のために—意識改革への提言—」  
 武 田 詩 織 「中学校における平和教育の試み—その実践と課題—」

水 野 菜保子 「私という存在」  
 田 島 南 「『嫌韓』という現象について—日韓関係の過去・現在・未来—」

## ・指導教員 小野寺静子

伊 東 あかね 「梅の取り合わせの歌」  
 奥 村 由理香 「中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子の贈答歌について」  
 小山田 郁 子 「額田王は恋をしたのか」  
 國 原 美 穂 「桜と稲作文化」  
 児 玉 梨 紗 「万葉の夢と信仰」  
 小手川 昌 也 「古事記におけるヤマトノヲロチ退治伝説の意義」  
 小 林 清 香 「『讃酒歌』にみられる大伴宿禰旅人の人物像」  
 佐 藤 未奈子 「和歌に詠まれた日本の色」  
 杉 下 由 「湯原王と娘子の贈答歌」  
 長 野 秀 史 「世に広まる『百人一首』」  
 村 山 大 輔 「王申の乱考察—扶桑略記が語る天智暗殺は真実か—」  
 黒 田 淑 恵 「湯原王とはどのような人物か」  
 鈴 木 彩 乃 「『万葉集私注』から見る歌の解釈—大伴家持に関わる女性たち—」  
 戸 川 真由子 「西行の恋歌」

## ・指導教員 田中 綾

秋 山 左 知 「『助かる』から『助ける』へ—佐藤友哉『子供たち怒る怒る怒る』ほくの「友だち」と救い主—」  
 五十嵐 涉 「『福沢心訓』を読み解く」  
 井 口 裕 太 「文学から考える〈アイヌ〉—鳩沢佐美夫の事績といま—」  
 佐 藤 純 基 「伊坂幸太郎試論—現代における生き方を指し示す物語—」  
 堀 本 佳奈美 「『モモちゃんとアカネちゃんの本』シリーズにおける比喩—「離婚」と「成長」をキーワードに—」  
 荘 司 和 也 「『町田康「くっすん大黒」論』」  
 奥 山 菜 摘 「『夏の葬列』論—文学作品としての「読み」、指導書としての「読み」を比較して—」  
 小 林 正 人 「創作『デブって言うな』」  
 齊 藤 夕 介 「創作 久井千岳短編集」  
 中 嶋 怜 美 「三浦綾子『銃口』を読む」  
 長 澤 友 美 「恋愛小説として読む『クロスファイア』」  
 川 越 朱 理 「パニック障害」  
 藤 川 恵 「福井晴敏論—『亡国のイージス』如月行にみる人物像の魅力—」

## ・指導教員 大谷通順

金 森 麻 衣 「中国人キャラクターの「アルヨ」について—「である」の成立とピジン日本語の発生—」  
 林 恵里奈 「〈哭〉とはなにか—西岡氏と栗原氏の論を通じて—」  
 森 本 紗緒里 「『封神演義』と『西遊記』における哪吒太子—小説からみる神としての哪吒太子—」

## ・指導教員 テレングト・アイトル

- 阿 部 涼 祐 「『記憶の湖』と『パイロットフィッシュ』—大崎善生と『パイロットフィッシュ』について—」  
 久 保 誠 也 「『機能する小説』という一つの読みの実験—円城塔の難解小説『Boy's Surface』への解説—」  
 長谷川 晋太郎 「『武士道』解説への挑戦」

## ・指導教員 追塩千尋

- 安 達 風 馬 「『鸚鵡籠中記』作者朝日文左衛門—江戸時代下級武士の実像—」  
 入 江 亮 佑 「木曾義仲の人物像」  
 小 玉 知 輝 「怨霊の政治的影響—奈良時代終期から平安時代初期を中心に—」  
 今 野 智 恵 「『源氏物語』における物の怪—六条御息所を中心に—」  
 佐 藤 逸 美 「般若心経は何故現代で読まれるのか」  
 佐 藤 詩 織 「真田幸村の人物像」  
 信 太 麻 美 「『日本霊異記』と行基」  
 瀬 川 明 秀 「御成敗式目に見る鎌倉時代の悪口」  
 竹 内 まどか 「平安時代の物忌」  
 永 井 里 奈 「光源氏を取り巻く女性たち—平安期恋愛形態の一考察—」  
 村 田 みなみ 「『蜻蛉日記』にみる貴族層の婚姻形態」  
 山 田 百合香 「平安時代の装束にみる色彩と美」  
 鳴 海 太 輔 「任那日本府研究にみる古代日朝関係史研究の諸問題」

## ・指導教員 船岡 誠

- 碓 矢 真 由 「一遍、宗教家としての彷徨」  
 石 川 沙 織 「砂糖の歴史」  
 加 賀 準 己 「一休と養蚕について」  
 加 藤 太 樹 「武田信玄の信仰心」  
 木 村 紗 良 「仏教の民間普及について」  
 久 保 昌 江 「日本におけるキリスト教布教の背景と日本人のキリシタン信仰」  
 下 條 めぐみ 「庭園と美意識—『作庭記』から夢窓疎石まで—」  
 杉 澤 康 太 「現代日本人の無宗教とは何か？」  
 高 橋 弘 毅 「時かける浦島」  
 中 田 晃 裕 「竹崎季長と蒙古襲来絵詞」  
 中 野 和 明 「歴史素材としての酒吞童子」  
 廣 田 麻奈美 「千利休と細川忠興の関係について」  
 古 川 加奈子 「仏教の女性観」  
 山 口 啓 太 「長宗我部氏滅亡の要因と分岐点」  
 大 田 将 斗 「最澄と大乘戒」  
 小 見 あすか 「苦界に生きた女」  
 鈴 木 菜見子 「葬式の変遷」  
 宮 本 咲 良 「輝く女性たち—それぞれの時代を生き抜いて—」  
 福 田 康 伸 「黒田官兵衛」  
 春 名 克 「ライトノベルの成立と発展」

## 〈英米文化学科〉

### ・指導教員 井上真蔵

- 安 達 智 美 「海を越えたトットちゃん—ユニセフ親善大使になった黒柳徹子—」  
 小野寺 由 佳 「孫正義—その独自の行動と発想の原点—」  
 香 川 恵 利 「小学校英語必修化について—「英語が使える日本人」育成のために小学校必修化は適切か否か—」  
 佐 登 淳 也 「林文子—一人の心を惹きつけるコミュニケーション—」  
 佐 藤 もとみ 「イサム・ノグチの世界—アイデンティティを探る長い旅—」  
 瀬 戸 和 美 「三國清三—世界が認めた日本人シェフ—」  
 常 陸 佑 美 「東京ディズニーランド—日本で新たに生まれたディズニー文化—」  
 日向寺 かほり 「給食が与える集団行動への影響」  
 森 あすさ 「岩倉使節団と異文化アメリカとの出会い」  
 山 口 愛 美 「クルム伊達公子—世界テニスで見た異文化—」

### ・指導教員 岩崎まさみ

#### 1 部

- 岸 田 麻 希 「日本の食文化の変化—国民食ラーメンを例として—」  
 小 山 博 美 「アイヌ民族の権利と国際宣言」  
 谷 崎 貴 子 「韓国建国神話・民話から見る日本と韓国のつながり」  
 徳 山 諒 「悲劇のサッカー王国、ユーゴスラビア」  
 浜 田 悠 加 「難民問題」  
 松 本 佑 紀 「アメリカ人種差別の歴史—ジャッキー・ロビンソンとキング牧師の存在—」  
 向 奈都紀 「家族の未来」  
 山 口 絵里香 「ナショナルトラスト・チコロナイにおける北海道の環境保全について」  
 山 下 愛 未 「民話にみられる民族間の価値観の違いについて」  
 米 澤 遼 「ヒトはなぜ服を着るのか」  
 北 山 智 美 「カパラムビができるまで」  
 杉 山 元 太 「日系カナダ人移民史から見る日系人のアイデンティティの変遷」

#### 2 部

- 関 仁 美 「ナツばあちゃんの生涯—アイヌと和人の狭間で—ライフヒストリー研究」  
 戸子台 ともみ 「日本で働く外国人」  
 松 本 悠 香 「人と犬の関わりについて」

### ・指導教員 大塚秀之

- 阿 部 功太郎 「アメリカの中東戦略とイラク」  
 伊 藤 一 明 「アメリカにおける格差の現状と貧困がもたらす諸影響についての考察」  
 大 貫 真里恵 「アメリカにおける黒人への人種差別と人種間対立」  
 菅 野 みどり 「アメリカの医療保険制度とその問題点」



# 人文学部第 14 期生 卒業研究題目一覧

木 村 渚 「アフママーティブアクションとマイノリティーの問題」  
 柴 田 紗 里 「現代アメリカの労働問題」  
 高 橋 廣 彰 「EDLP のもたらす影響」  
 竹 田 一 基 「世界的経済危機からの脱出」  
 土 居 枝里子 「黒人の貧困」  
 吉 崎 風 美 「第二次世界大戦と日系アメリカ人」  
 鹿 野 俊 一 「アメリカの格差」  
 尾 田 圭 太 「9.11 テロの疑惑」  
 上 林 睦 「貧困と子ども」  
 高 瀬 寛 典 「世界の人間が要求するサケ」  
 船越谷 隆 志 「日本とアメリカの死刑の比較」

## ・指導教員 川上武志

上 村 達 郎 「Goblin Market—ゴブリンの世界観とロセッティの求める愛とは—」  
 海老子 洋 平 「ワーズワスの自然観について—幼少期における湖水地方の記憶を頼りに—」  
 河 田 知 也 「『老人と海』論—老人によって示される人間にできること—」  
 佐々木 安 里 「The Poem of Winnie-the-Pooh—In which Pooh and Milne made excellent songs, and it makes us happy.—」  
 高 島 孝 介 「The Great Gatsby ～偉大な男に惹かれたニック・キャラウェイ～」  
 舘 田 和 佳 「ピーター・パン—「大人」「母親」というキーワードに焦点を置いて—」  
 長谷川 悠 「THE HOBBIT—ビルボ・バギンズの魅力—」  
 山 内 智 晴 「ジークル博士とハイド氏—人間の持つ裏の顔—」  
 渡 部 和 正 「Pride and Prejudice ～幸せとは何か～」  
 堀 江 泰 代 「ホイットマンの詩から読み取る現代日本人が学ばべきホイットマンの考え」  
 大 矢 翼 「エドガー・アラン・ポーについて」  
 堀 本 隆 之 「シルヴィア・プラス～彼女の人生を辿る～」

## ・指導教員 栗原豪彦

江 尻 拓 也 「文学における日英語の比較・諸相」  
 小 室 にちか 「絵本から得るコミュニケーション能力」  
 坂 本 亘 「外国の笑いと言の笑いの違いについて」  
 高 山 みのり 「宇多田ヒカル／Utada の歌詞の世界」  
 鳴 海 貴 也 「談話の結束性と首尾一貫性と英語理解」  
 本 間 真 弓 「日本人と英語を話す外国人の比較から見た外国人のキャラクターを表わす表現の分析」  
 宮 北 愛 実 「ディズニー接客法」  
 吉 本 光 希 「私達と「言語」」  
 渡 部 崇 仁 「誤解のメカニズム」  
 渡 辺 諒 「サッカー（フットボール）に見る言語の違い」

渡 邊 亮 太 「ジャム・セッションとコミュニケーション」

## ・指導教員 桑原俊一

石 井 文 菜 「キリスト教の祝祭日」  
 板 垣 亜 以 「トルコ共和国—カッパドキアと岩窟都市—」  
 上 野 加奈未 「古代エジプトのピラミッド—謎の探求と解明—」  
 川 田 善 計 「オバマ大統領の誕生—一人種差別問題を中心に—」  
 北 本 万 智 「暦の流れに沿って捉える復活祭」  
 小 林 加 奈 「ホロコーストの経緯と惨状」  
 齊 藤 友 里 「南北戦争と公民権運動の歴史と背景」  
 高 瀬 浩 樹 「地球環境問題」  
 杉 本 芙美子 「西欧の街並みはなぜ美しいか—日本の住宅とイギリスの住宅を比較して—」  
 須 見 綾 人 「世界遺産の現状と課題」  
 中 橋 哉 子 「アメリカ同時多発テロ事件に関する諸問題—対テロ戦争の正当性とは—」  
 中 川 綾 「アメリカン・ミュージック—ポピュラー・ミュージックの歴史」  
 熊 谷 美 穂 「ノンバーバルコミュニケーションと異文化コミュニケーション」

## ・指導教員 竹内 潔

瘡 師 里 美 「放射線が生命に与える影響について」  
 土 田 和 洋 「着床前遺伝子診断の普及と倫理面からの懸念」  
 土 井 緋佳留 「近視の矯正と補正について」  
 長 谷 沙夜香 「癒しについて～アロマテラピー」  
 竹 内 渉 「花粉症と口腔アレルギー症候群」  
 星 昭 「遺伝子組み換え技術について」  
 出 村 有 加 「サイバー犯罪～現状と予防対策～」  
 秋 葉 健 太 「電磁波が人に与える影響」  
 三 上 り え 「脳死と臓器移植：臓器移植法改正の動向」  
 三 浦 加奈子 「食物アレルギーについて」  
 後 藤 大 輔 「HIV 感染と AIDS について」  
 宮 崎 可奈子 「日常生活の中の安全とは：身近な危険物質を知るには」

## ・指導教員 常見信代

相 木 まどか 「テューダー朝とアーサー王伝説」  
 大 高 沙央里 「Lebor Gabála Érenn—アイルランド侵入の書—ゲール民族の建国神話」  
 金 子 知 美 「グラスゴーのティールーム—もう一つのイギリス紅茶文化—」  
 小 林 沙 織 「アーツ・アンド・クラフツ運動」  
 澤 田 知 里 「ヴィクトリア時代の余った女性たち」  
 長谷川 真 美 「香料文化～18 世紀フランスを中心に～」  
 早 瀬 友加里 「イギリスのゴシック建築について」  
 松 井 遥 「テューダー朝の女性たち～王位継承のルール」  
 松 本 圭 司 「イギリス公共圏についての歴史的考察—17 世紀、18 世紀のコーヒー・ハウスを中心に—」  
 室 田 恵 美 「キャロライン・アミーリア・エリザ

横田 絵美 「シェイクスピアと役者」  
青木 麻里絵 「ガリア戦記―カエサルとウェルキン  
ゲトリクス―」  
五十嵐 愛絵 「WARS OF THE ROSES」  
小杉 弓子 「イギリス紅茶論争」  
田川 大介 「イギリスの近代スポーツ史」  
服部 倫子 「北アイルランド問題」

## ・指導教員 濱 忠雄

梅里 美妃 「ジャンヌ・ダルク―ジャンヌ・ダルク  
の生涯と二つの裁判―」  
大金 加奈 「アーミッシュの人々―彼らの暮らし  
とアメリカとの関わり―」  
河村 美岬 「統一ドイツの希望と現実―消えない  
「壁」の存在―」  
佐藤 菜生 「反グローバリゼーションの国、キュー  
バ」  
高橋 美由紀 「18世紀 絶対王政とバリー庶民と  
特権階級の生活の対比―」  
田辺 信宏 「高福祉・高負担国家スウェーデン」  
南 雲正寿 「ナポレオン・ボナパルト―政治的戦  
略がもたらした遺産と破壊―」  
花岡 夏美 「ジャン＝ジャック・ルソー―人格と  
思想―」  
堀 日香梨 「19世紀ヴィクトリア朝の大英帝国  
―貴族生活と庶民生活の違い―」  
我孫子 明日香 「フランスにおける植民地政策」  
江口 祐香 「革命に飲み込まれた“悲劇の王妃”―  
マリー・アントワネット―」  
葛西 ゆかり 「18世紀イギリスの医療と奇人ジョ  
ン・ハンター―現代に引き継がれる医  
療の誕生―」  
今野 仁美 「欧米における魔女狩り・魔女裁判―  
その背景と成立から衰退まで―」  
山本 崇明 「ナチス・ドイツ下の若者たち―ヒト  
ラー・ユーゲントと青少年団―」

## ・指導教員 安酸敏眞

阿波加 知歩 「コペルニクス」  
伊藤 航也 「デカルト自身と神の存在証明」  
熊野 真実世 「プラトン―その生涯とイデア論―」  
佐々木 崇人 「ジークムント・フロイトの人間観」  
柴山 宏子 「ニーチェの永遠回帰思想とニヒリズム  
の克服」  
鈴木 啓司 「環境と思想」  
筒井 祥子 「翻訳の歴史と理論」  
西川 健太 「ルネ＝デカルトによる“コギト＝エ  
ルゴ＝スム”の解釈」  
三品 春華 「ルターと宗教改革」  
成田 和也 「マキアヴェリと君主論」  
菊地 誠 「クリストファー・ドーンソンがみたヨー  
ロッパの世俗化について」  
佐藤 善一 「ヨーロッパ古典文学におけるワイン」  
高橋 和宏 「グリム童話と魔女」  
塚原 紀子 「The Bible of Parchment―中世  
ヨーロッパの写本文化における羊皮紙  
の果たした役割―」  
植村 麻那 「C.S. ルイス―ナルニア国物語に描か  
れた別世界」

## ・指導教員 米坂スザンヌ

秋田谷 昭吾 「Sound Differences between  
Japanese and English」  
小笠原 知美 「Global Language」  
都地 郁美 「Supaimozu: Making Japanese  
Subtitles for Foreign Movies」  
伊藤 隆博 「Aphasia」  
竹久 和弥 「Teaching the Pronunciation of  
Japanese as a Foreign Lan-  
guage」  
佐々木 慎一 「Humor and Language」  
松田 慎介 「Lost in Translation」  
湯浅 良太 「Language and Color」  
植松 寛 「Pragmatics」  
平田 ゆき 「Picture Books and Early Lan-  
guage Development」



表紙「女夷」図

彩色、26.7×38 cm (間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』坤所収 北鴛文庫所蔵)

間宮林蔵(安永9[1790]―天保15[1844])は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地(樺太)探索の幕命を受け、文化5(1808)年から翌年にかけて、東海岸は北知床岬まで、また西海岸は北上して間宮海峡を確認、更に北端近くまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助(秦貞廉)が挿画を加え編輯したものである。

北鴛文庫所蔵、乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界余話』と題して、文化8(1811)年に幕府へ献上された貞助自筆本(国立公文書館内閣文庫所蔵)に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られてないが、安政2(1855)年刊の流布本『北蝦夷図説』を始めとして多くの伝写本がある。

この図は『東韃圖記』坤巻の「オロッコ夷」に収められている。オロッコとは、当時、樺太(サハリン)の中北部に居住していた先住民族ウィルタの旧呼称で、「女夷」はウィルタの女性である。男女夷とも「其人物大に蝦夷島に異にして」とあり、風貌、生活、俗習等が詳述されている。女夷については、髪を様々に結い、「其容貌顔色蝦夷島に比しては美艶にして且人に媚るの妖態多く、浴湯施粉の事はなしといへども、日々其面を水濯し其頭を梳りて粧飾をなす者多し」とあり、その耳飾も、「大環にして圖のごとく数環をかけ玉を飾る」とある。また、衣服は獣魚皮を以て製し、「女夷は肌膚を出す事を恥とすれば其衣長くして踵に及び肉猶褌子脚絆を著け裳末飾銅を附る事圖のごとし」となかなかお洒落で妖艶な様が伺える。なお、ウィルタについては、林蔵の報告により、初めて日本人の知るところとなった。

(北鴛文庫 佐々木光子記)

## 編集後記

見習い期間が終わりながらも、前年度フォーラム委員の菅先生には何かとご指導頂き、33号を発行できる運びとなりました。「研究、その足跡」には2010年1月から6月以外のデータが含まれています。先生方や学生の皆さんの声が届けば、と願いつつ。(桑原 俊一)

本年度より編集作業に加わりました。まだ桑原委員におんぶにだっこの状態です。今年6月の札幌は真夏日が観測史上で最多(3日)だったそうですが、酷暑のなか原稿を執筆してくださいました先生方、ありがとうございます。(大谷 通順)

人文フォーラム 33：2010年8月3日発行 編集人：桑原 俊一、大谷 通順 発行人：安酸 敏真  
発行：北海学園大学人文学部(札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161) 印刷：(株)アイワード